

芸術的探究としての音楽科鑑賞授業における 子どもの興味の発展の様相に関する教育実践学的研究

— デューイの興味概念を手がかりに —

学籍番号 219343

氏名 中瑠璃香

主指導教員 兼平佳枝

副指導教員 澤田和夫

I 研究の目的と方法

筆者がこれまでに受けてきた音楽科鑑賞授業では、楽曲に対するイメージや感想を述べる場面はあっても、自分の考えをもって音楽を聴き進めていくような場面はあまりなかった。子どもが自分の考えをもつにはその対象への興味が必要となるのではないかと考え、J. デューイの興味概念に着目して音楽科鑑賞授業における子どもの興味の現われに関する研究を行いたいと考えた。デューイの興味概念に着目した音楽科授業の実践学的研究では、芸術的探究としての歌唱授業や創作授業といった表現領域の授業において興味が発展するとされていた。音楽をじっくりと聴いていくことが主な活動となる音楽科鑑賞授業では子どもの興味はどのように発展するのかを明らかにしたいと考えた。

したがって本研究の目的は、芸術的探究としての音楽科鑑賞授業における子どもの興味の発展の様相を教育実践学的な方法で明らかにすることである。研究の方法として先行研究とデューイの著書から芸術的探究と興味概念について整理し、理論的視点を踏まえて研究授業の計画・実践を行い、授業記録から分析を行う。最後に結論と考察を述べる。

II 芸術的探究としての音楽科鑑賞授業

本研究において、芸術的探究の定義を「質的な素材との相互作用を通して不確定な状況から確定した状況へと転化させることを本質とした問題を解決していく活動」とした。そして芸術的探究と学習指導要領における音楽科鑑賞授業との関連について整理した結果、芸術的探究としての音楽科鑑賞授業を「音楽のよさや美しさを他者に根拠をもって伝えるために、知覚と感受の関わりについて考えながら問題解決を行う授業」とした。

III デューイにおける興味概念

本研究におけるデューイによる興味を、「ある対象や観念が活動の持続や成長に必要なために、行為を通じて、対象や観念と自己とを同一化するときに伴うもの」とした。興味は「直接的興味」、「間接的興味」と呼ばれるものが両者を行き来することによって発展する。直接的興味とは、単純な目的においてその活動に没頭し、環境との相互作用を通して自我と対象を同一化している時の興味であり、間接的興味とは、より複雑な目的へと到達が延期した時の興味

である。間接的興味では困難や手段に基づき複雑な目的に対して目論見が形成され、目論見は問題解決の仮説として試しては修正するというように活動を方向づけていくこととなる。そして、問題を解決し複雑な目的が実現されると再び自我と対象を同一化し直接的興味になるというように、直接的興味と間接的興味が両者を行き来することで興味は発展する。

IV 研究授業の計画・実践・分析

芸術的探究の過程を辿るよう、藤井凡大作曲《さくら 箏独奏による主題と六つの変奏》を教材とし中学校1年生を対象に研究授業の実践を行った。分析の結果は以下の通りである。

初めに音楽がどんな感じがするのかを聴くということが興味の対象として現れ、全ての場面において既に抽出生徒のイメージが形成されていたところで、そのイメージと他者のイメージとの間にずれが生じて困難を感じていた。場面②・③において問題が設定される際は、他者のもつイメージに対する、「主題よりも変奏①は本当に速くなっているのか」といった音楽を形づくっている要素を問うようなものや、「変奏③のどこで激しくなったのか」といった場面を問うようなものが設定されていた。それらの問題を解決するための仮説として「音楽に合わせて手を叩いてみる」、「音楽を聴きながら特定の場所で手を挙げてみる」というような、音楽に対する身体活動を通して問題を解決しようとする目論見が形成されていた。しかし場面①では、抽出生徒が困難を感じていたものの、問題の設定がされず興味を発展させる姿がみられなかった。場面②・③で問題を解決していく中では、困難を感じる前には興味のなかった「音楽に合わせて手を叩く」「音楽を聴きながら特定の場所で手を挙げる」という行為や「グリッサンド」という知識が興味の対象として現れていた。そして問題を解決し満足した時「変奏①では速度とリズムが変化しているからスペインっぽい感じ」がするというような問題解決によって理解した知覚と感受の関わりが興味の対象として現れていた。

V 結論と考察

研究の結果、興味の発展の様相は次のようになった。①音楽に対してどんな感じがするのかを聴くことが興味の対象となる。興味をもって音楽を聴く中で音楽に対するイメージを形成し、他者のもつイメージとの間にずれが生じ困難を感じることで興味の発展の契機となる。②他者のもつイメージに対して、音楽を形づくっている要素について問うような問題や音楽のどの部分から得られたものかと場面を問うような問題が設定され、その問題を解決するための仮説として、音楽に対する身体活動を通した目論見が形成される。③形成された目論見を実行していく過程で目論見に含まれる音楽に対して身体を動かすという行為そのものや、問題に関連する知識が興味の対象となる。④問題を解決して満足した時、問題解決によって理解した知覚と感受の関わりが興味の対象となる。

芸術的探究としての音楽科鑑賞授業では、音楽に対するイメージを十分に形成し他者と共有すること、誰にでもできる身体的な動作を用いて音楽との相互作用を行うこと、教師が子どもの困難に気づき問題として取り上げることが興味の発展において必要となると分かった。今回の実践では目論見における具体的な手段が教師によって提案されたものばかりだったため、子どもが具体的な解決方法を選択できるような環境構成が必要である。今後は今回の研究で得た知見を踏まえながら単元全体を通しての興味の発展の様相について明らかにしていきたい。